

# 基礎研 レター

## 北イタリアのまちづくり事例に学ぶ 公共空間活用の重要性

### ～ その1: フィレンツェの魅力高める光の演出 ～

社会研究部 上席研究員 篠原 二三夫  
(03)3512-1791 fshino@nli-research.co.jp

#### 1—はじめに

一昨年の2月7日から2月19日にかけて、北イタリアのフィレンツェ、ボローニャ、フェラーラ、ヴェネツィア（本島及びメストレ地区）、ヴィアレージョなどの5都市を訪問し、各都市のまちづくりにおいて、どのように公共空間が活用されているのかを調査する機会を得た。その後の情報も含め、今後数回に分けて報告する<sup>(1)</sup>。最初に、本稿ではフィレンツェの光の演出について報告する。

ここで言う公共空間の多くは道路や歩道、広場、そして数多い都市部の歴史的遺産である。フランスやスペインなどと同様に、イタリアの市街地を歩くと、オープンカフェが並び、広場ではマルシェ（市場）や催し物に出くわす。このように公共空間がうまく活用されておれば、まちの随所に活気が生まれる。しかし、このような公共空間の商業的利用に際して、旧市街地に多い歴史的遺産の価値が損なわれることはないように配慮され、街並みの景観が歪められることはない。

また、日本に次いで高齢化が進むイタリアにも空店舗や空地は多く、その再利用は大きな課題である。再利用者が定着することが鍵なので、徐々にしか地域への経済的効果は生じないが、再利用が進めば、店舗等が面する道路や広場には人々が集うようになる。こうした空店舗等の再利用をうながすことも、公共空間の活用と表裏一体なので、ボローニャで聴取した事例を報告する。

既成市街地の大規模な再開発などによらずとも、既存の公共空間を当初の目的以外にも弾力的かつ多様に活用し、市民と事業者、公共の三者がより大きな便益を得られるような「可変的利用」<sup>(2)</sup>を推進することによって、街区や都市の魅力が高まり賑わいが生まれる。北イタリアでは、こうした公共空間を利用したまちづくり事例を数多くみることができた。

わが国では、国レベルでは都市再生整備計画の区域内において特例道路占用区域を設け、オープンカフェや景観に配慮した質の高い広告塔などの配置が始まっている。地方公共団体では、神戸市など

(1) 国土交通省国土交通政策研究所が実施した「都市空間における可変的利用方策に関する調査」の海外調査にご協力する機会を得て、北イタリア5都市を訪問し、公共空間の活用状況：可変的利用について調査を行った。この基礎研レターは調査当時のご担当者である尾藤主任研究員（当時）及び阪井研究員（当時）のご了解を得て執筆したものである。ご両名のご理解に深謝する。

(2) 「可変的利用」については、国土交通政策研究所報の第56号（2015年春期）に、国内調査と海外調査の速報が掲載されているので、是非ともご参照いただきたい

が「協定道路制度」を設け、地域団体がオープンカフェや休息ベンチ・飾花を設置できるようにしている。東京都では「しゃれた街並みづくり推進条例」における「まちづくり団体の登録制度」を通じて、公開空地等において、オープンカフェや有料イベント、市場などを開催することもできる。その他、全国各地においても同様な動きが出始めていることから、本報告が何らかの参考となり、日本における公共空間の活用に役立つことができれば幸いである。

図1 フィレンツェ・シニョリーア広場やガレリア下歩道上、小路などのオープンカフェ



(資料) 筆者撮影。朝の撮影のため、まだ人通りがなく残念である。

## 2——フィレンツェの魅力高める光の演出

フィレンツェ市はイタリア共和国中部の北西側にあるトスカーナ州の州都であり、人口規模は国内第8位で約36万人である（第1位のローマは人口約260万人）。15世紀のフィレンツェはルネサンス文化の中心地として栄え、旧市街地は「フィレンツェ歴史地区」としてユネスコの世界遺産に登録されているが、80年代に約45万人だった市の人口は既に20%も減少している。

歴史的遺産の保全が義務づけられているフィレンツェでは、地区再開発などの事業は旧市街地では難しい。そこで、EUにおける都市間競争の中で、都市としての魅力を維持し高める方策の1つとして、公共空間や歴史的遺産を光によって演出する「フィレンツェ・光の芸術祭」(Firenze Light Festival: F-Light) が2011年から企画され、毎年12月上旬から1月中旬にかけて行われてきた<sup>(3)</sup>。

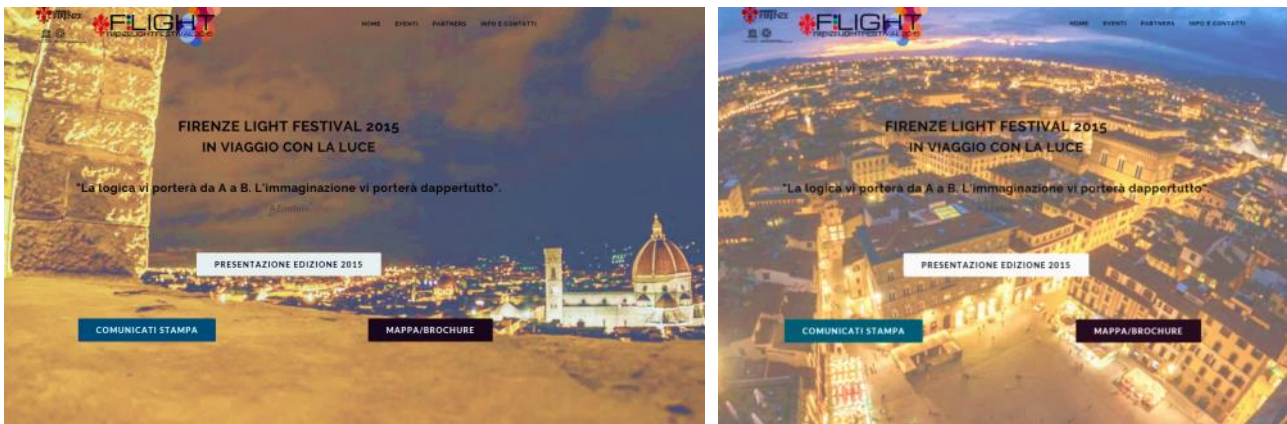
日本でも、札幌や仙台、新潟、丸の内中通りや表参道のイルミネーション、神戸のルミナリエなど各地で著名な大規模イルミネーション事業が実施されている。LEDが普及し利用が安価になったこともあり、市町村や商工会レベルでも、今や季節になると、イルミネーションやプロジェクション・マッピング事業を随所でみることができる。

しかし、2011年以降のF-Light事業は、日本の商業地の特定の区画を中心とした演出と比べると、旧市街地の歴史的遺産を軸とするイベントと連携しながら市内全域の公共照明網と連担し、フィレンツェ全市全域を多様で品格ある光りに満たしている点に大きな違いがある。これを実現しているのが、フィレンツェ市内の公共照明のすべての維持管理や運営を行っている民間会社の形態をもつ準公共機関のSocietà Illuminazione Firenze (Silfi)社とフィレンツェ市である。著名なアート・ディレクター

(3) 従来からも小規模の光のイベントが行われていたが、LEDの普及や照明芸術の確立によって、新たな企画で2011年からF-Light事業が始動している。F-Light事業の詳細については<http://www.lightfirenze.it/>を参照。

を起用し統合的なコンセプトを掲げてマネージさせるとともに、民間のスポンサーを得て、強いリーダーシップを発揮し事業を企画運営している。以下、具体的な事業運営について報告する。

図2 Firenze Light Festival 2015 in Viaggio Conlaluca のウェブページより



(資料) <http://www.flightfirenze.it/> より転載。左は市庁舎よりフィレンツェのドゥウーモ方向、右は市庁舎より見た市内の照明景観。

## 1. 事業主体

フィレンツェ市とともに共催し、実質的に事業を推進しているのは、Silfi 社である。同社は、市が30%、ラベンナの民間実業家である Pierco Branzanti 氏が70%の株式を保有している民間会社である。同社の2013年の決算書によると、市内の公共照明等の通常事業と F-Light 事業等による利益は250万ユーロである。配当総額は90万ユーロなので、市には27万ユーロの配当収入が入っている。

Silfi 社は民間会社であるが、市全域の街路灯やアルノ川・広場・歴史的資産のライトアップなど景観照明のすべての点灯・消灯の管理や維持、更新を請け負っている。さらに、新たな照明機器の開発や照明システムの開発を通じて、駐車場等の施設の案内や空き情報案内版などの電光掲示板、電気自動車の充電設備とともに、街頭の各種監視カメラ (CCTV) の設置・管理も行っている。

市の照明や信号、監視カメラに至る電気機器関係のすべてを民間会社1社が受託することは日本では考えにくいだが、この背景には、Silfi 社の70%出資者である Branzanti 氏がかつてフィレンツェ市内を流れるアルノ川の氾濫による洪水で壊滅的な打撃を受けた公共照明システムの復旧と新技術の導入のために多大な資金援助を行い貢献した事情がある。同氏は「フィレンツェ市の光の父」と呼ばれ、市からギルドの称号を授与されている。

図3 アルノ川付近の照明による景観



図4 シニョリーア広場のネプチューン像



(資料) 図3及び4は共に Silfi 社のプレゼン資料 “City of Florence, Temporary Use of Public Space for Lighting”による。

図5 アルノ川ヴェッキオ橋の照明による景観



図6 ヴェッキオ橋のプロジェクション・マッピング



(資料) 図5及び6は共に F-Light 2015 資料による。図4は著名の現代アーティスト・ビデオデザイナーである Stefano Fake 氏による Fake Factory が実施した、ヴェッキオ橋へのプロジェクション (ビデオ)・マッピングの一景である。

## 2. 対象公共物

市内すべての公共物 (道路、歩道、広場、橋梁、河川等の公物および民間建築や歴史的遺産等を含む)。

## 3. 事業概要

### (1) 背景

フィレンツェ市では人口が減少するとともに観光収入も伸び悩んでいるが、旧市街地では再開発などによる思い切った振興策はとれないことから、何らかの施策を講じ、新たな魅力を創出する必要がある。

### (2) 事業スキーム

Silfi 社は公共照明を担当する市交通局や経済観光開発局、情報・メディア局と連携し、特に技術面を担当している。同社は芸術面からの要請通りに光を演出できる専門的あるいは職人とも言える照明技術者を擁しており、Silfi 社の存在意義を一段と高めている。Silfi 社に対する市の支援は、通常、公共空間を所定の目的以外のために利用する場合に課せられる占有料を、この事業では公共性を重視して課さないことである。

市の各局の役割は次の通りである。市交通局は、Silfi 社による公共照明の時限的活用を認可する。経済観光開発局は、公共空間の時限的空間利用に関する認可を行うとともに、個々のイベント及び市内全域事業における芸術性を調和させるアート・ディレクションを担当する。このために、一貫したコンセプトに基づき全事業をマネージする専門家を起用<sup>(4)</sup>するとともに、スポンサーによるイベントへの資金調達を担当する。情報・メディア局は、これらの動きを逐一広報するとともに、事業実施に係る最終報告書作成を担当する。

### (3) 事業内容

芸術性や社会性、観光促進、今後のビジネス展開を念頭に、市内全域の道路や歩道、広場、歴史的遺産などの公共空間を活用し、照明による演出やプロジェクション・マッピングによるアートパフォ

(4) F-Light 2015 では、フィレンツェやルカ、プラトー、ポローニャ、ミラノ、ベニス、パリ、リヨン、ルクセンブルグなどにおける芸術祭・展示会・イベント等のマネージメントで著名な Sergio Risaliti 氏をアート・ディレクターに起用している。

ーマンスを実施する。

具体的には、シニョリーア広場 (8,000 m<sup>2</sup>)、サント・スプリト広場 (5,000 m<sup>2</sup>)、サンタ・マリア・ノヴェッラ広場 (350 m<sup>2</sup>)、ムラテ (2,500 m<sup>2</sup>)、中央市場 (5,000 m<sup>2</sup>) などの公共空間や歴史的遺産を拠点として、様々な光のイベントが開催されている。

F-Light 2014 では、“Beyond Generations” (世代を越えて) をコンセプトに掲げ、市民も子どもも参加できるようなイベントが導入された。子どもたちからオンラインで送られたすべての絵を、速やかにサント・スプリト教会の壁面を利用したプロジェクション・マッピングで投影するイベントである。多数の絵が毎日届き、観光客だけではなく、市民からも、非常に感動的で思慮深い、魅力的なイベントという評価が得られた。今後は他市との連携を実現することも考えているという。

昨年の F-Light 2015 は、国際連合総会第 68 会期 (2013 年 12 月) において、2015 年を光技術の革新によって様々なチャレンジが進んだ国際光年 (IYL2015) とすることが宣言されたことを受け、「F-Light 2015 光とともに」というコンセプトに基づき開催された。

市内のあらゆる場所の公共空間や歴史遺産で様々な光のイベントが行われるが、F-Light では、このような統一コンセプトに基づき、アート・ディレクターによってすべてのイベントが美しく調和するようにマネージされている。

図7 サント・スプリト教会の壁面(正面)を用いた子どもの絵のプロジェクション・マッピング



(資料) F-Light 2014 資料抜粋。このプロジェクションは、European Design Institute (IED), <http://www.ied.it> の協力による。

### 3—フィレンツェの公共空間利用のまとめと今後の事例について

フィレンツェでは、数多くの公共空間利用事例のうち、F-Lighting Festival について概要を報告し

た。民間が個々の商業目的で行うイルミネーションや光イベントからさらに飛躍し、公共がリードすることによって、都市レベルで調和ある美しい古都の空間を光の芸術で満たし、フィレンツェの市民や観光客を魅了している。旧市街地の歴史遺産は、新しい命を吹き込まれ、誰もが認める付加価値を得ている。公共空間の活用が、いかに都市の価値を高めるのかが強く認識できた訪問であった。

民間事業や市民の参加は当然であるが、これを実現しているのが、市や Silfi 社の強いリーダーシップとアート・ディレクターや照明技術等の専門家による取り組みである。日本の場合、市内の全域をまとめてマネージできるようなアート・ディレクションを行う人材を確保することは大変難しいものと考えられ、公共の役割と責任について改めて考えなければならぬと感じた。

次回以降は、ボローニャにおける中心市街地における歩行者優先事業や小路プロジェクト、空き店舗を再生するインクレディブル事業、フェラーラにおける広場等の活用とカノネ、MIBAC（文化財・文化活動観光省）の存在、ヴェネツィアの伝統的カーニバルと歴史遺産の保全、ヴェネツィア対岸メストレの都市構造改革と旧都市機能・遺産をつなげる回遊路整備事業などの紹介を行い、公共空間の活用を推進する重要性や方法論について考えていくことにしたい。

図8 市内の広場や通りにおける美しく落ち着いた光の演出



(資料) F-Light 2012 案内より。右下はストリートの景観を保ち、たたずまいを演出する公共照明器具。